童話

サンタクロースに化けた熊

水谷年惠

クリスマスの晩に、熊がサンタクロースのお爺さんに化けて、赤い頭巾を被り、白い綿の髯を附けて、枯草を一ぱい詰めた大きな袋を脊負つて、山羊の家へ行きました。雨戸の隙間から覗いて見ると、三匹の小山羊がサンタクロースのお爺さんに、おもちやを入れて貰ふ靴下を、銘々の枕許に置いて眠つて居ます。熊は雨戸をとん〳〵敲いて

「開けて呉れ、わしはサンタクロースのお爺さんだよ。」

と言ひました。小山羊は皆眼を覺して、

「違ふよ、サンタクロースのお爺さんは、いつでも默つて煙突なら這入つて來るよ。」

と言つて、又眠つてしまひました。

熊は、これはしくじつたと思つて、そつと山羊の家の屋根へ上りました。そして煙突の口から、まづ枯草を一ぱい詰めた大きな袋を投入れました袋は竈の中へ落ちました。山羊のお母さんが其の袋へ急いで火を附けました。

袋に火が附いて、枯草がぽつと燃上りました。煙がもう〳〵と煙突から噴出して、今這入らうとして居た熊を包んでしまひました。熊は吃驚して屋根の上から飛降り、一目散に逃げて歸りました

智慧太郎

智慧太郎は赤ちやんの時から頭の毛を剪んだ事がありません。櫛でとかした事もありません。いつでも、もぢや〳〵にして放つて置きました。それに智慧太郎は天氣さへ好ければ、いつでも野原